

まよろうこ

vol.43

公益財団法人日本教育公務員弘済会

わたしらしく ― 巻頭インタビュー ―

絵本作家 **宮西 達也**

特集

令和4年度 第28回
日教弘教育賞
最優秀賞の受賞校2校に
インタビュー

心に残る子どもたち

山形県山形市立第四小学校 校長
村上 ゆかり

兵庫県立飾磨工業高等学校(多部制) 教諭
岩崎 誠司

教職員の健康を応援 **健康〈第3回〉**
**季節の変わり目の
不定愁訴回避のポイント**

My Second Life 〈vol.13〉

**外国人児童生徒たちの
未来のために**
丹羽 典子

わたしたちの学校自慢
専門高校シリーズ 〈vol.8〉
三重県立
相可高等学校



絵本作家

宮西達也

目には見えないものを
伝え続けたい

大人にも子どもにも人気の絵本作家、宮西達也さん。
絵本の読み聞かせをしてくれる講演会も大人気

やんちゃなタッチャン

夜には芸者さんの下駄の音が聞こえる、静岡県熱海市で生まれました。三歳になる頃には小さな下駄を履いて商店街を走り回り、お姉さんたちによく可愛がってもらいましたよ。三味線の伴奏で唄を歌ってくれたりお菓子をくれたり。「タッチャン、タッチャン」と、自分で言うのもなんですが街の小さな人気者でした。そうそう、達也という名前は、「達者が一番」という両親の想いから。名前のおり元気でやんちゃ。人見知りもあるけれど、いろんな大人に囲まれて育ちました。

母親は、僕の長所を手放して認め喜んでくれる人でした。「達也は絵が上手ね」「足が速いね」「みんなと仲良くできて偉いね」って。優しく料理上手な、自慢の母でした。父親は熱海の観光業に従事していたのですが、新幹線が止まるようになってからは、ますます外国人観光客が増えて宿がすぐ満室に。そうすると父から、「今からフランス人が行くから、天ぷらと刺身を用意してくれ」と電話がかかってくるのです。そんな夜は、父のカタコトの英語と母の手料理でもてなし、僕の部屋に布団を敷き一緒に眠る。韓国人・イタリア人・アメリカ人と、宿にあぶれた外国人がしょっちゅう来ました。そのうち僕も慣れてきて、チゲ鍋の匂いがすると「今日は韓国人だな」と想像がつくようになりました(笑)。

人を喜ばせることの好きな父と優しい母は、「勉強しなさい」と、僕に一言も言いませんでした。伸びやかな幼少期が、僕という人間の土台を作ってくれたと思います。

絵との出会い

やんちゃな少年でしたが、絵を描いているときだけは静かにしていたようで、母親の勧めでお絵描き教室に通うことになったのです。それが絵との出会いでした。画用紙からはみ出してしまふ僕の絵を、「大胆でいいね」と褒めてくれる先生のおかげで、絵を描くことが大好きになっていきました。

高校二年生になり、「芸術学部の美術学科にいきたい」と先生に言ったところ、「基本ができていないから、実技試験には間に合わない」と言われて。先生に紹介された沼津の美術研究所の門をたたき、淡彩や木炭のデッサンなど、学校の授業の後毎日5時間は描き続けました。絵を描く仕事がしたい。その一心でした。

なんとか美術学部へ入学し上京した後は、アルバイトをし、映画や舞台など様々な世界を見ました。映画は年間に200本から300本くらい観ましたね。人形劇の製作プロダクションで、たまたま絵本の制作に関わる機会があったのですが、そこで初めて絵本という存在がインプットされたのかもしれない。とにかく忙しい大学生活でした。

宮西達也 みやにし たつや

日大芸術学部美術学科卒業後、人形美術、グラフィックデザイナーを経て、絵本作家に。又、絵本のみならず、童話や紙芝居、プラネタリウム、イラスト、エッセイ、小学校教科書東京書籍の挿絵なども手がけ、幅広いジャンルで活躍。『おとうさんはウルトラマン』、『うんこ』はけんぶち絵本の里大賞・びばからず賞も受賞。『にゃーご』は小学校2年生の国語の教科書に掲載。『おまえうまそうだな』は、小学校低学年の部読書感想画中央コンクール指定図書、2010年にはアニメーションで映画化されるなど、多くの作品を国内外へ送り出している。

卒業後は中堅どころのデザイン会社に就職し、印刷のことや紙のことを学びました。イラストレーターになることを目指し、楽しくて安定した生活が続きました。結婚し、子どもも生まれ順調でした。

絵本作家に

26歳のとき、「このまま不完全燃焼で終わりたくない」と会社を辞めて独立したのです。家族に迷惑はかけられないから、昼に制作活動と編集者回りをし、夜に肉体労働。あらゆるアルバイトをしました。当時住んでいた最寄り駅近くの道路は、すべて掘ったと思います。

昼間は家にいますから、子育ても一生懸命しました。具の無いナポリタンスパゲッティを山のように作っては近所の公園にいき、家族みんなでよく食べよく笑いました。何も買えない貧乏生活でしたが、楽しかったですね。妻のおかげです。

当初は絵本を描くといっても方法が分かりませんでしたから、本屋さんや図書館に並んでいる絵本をかたっぱしから読みにいきました。そのときに、子どもたちやお母さん方の嬉しそうなお顔や感動する顔をたくさん見て、絵本の素敵さや無限の可能性を感じたことも大きかったと思います。

我が子がおっぱいを飲む姿を見て作った作品が、「おっぱい」でした。絵本研究家の高山智津子先生が講演会で取り上げてくださるようになり、絵本の執筆依頼が少しずつ来るようになっていきました。

目には見えないものを

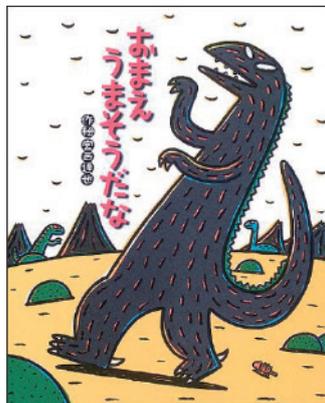
お金があること、立派な家に住むこと、高価な車に乗ること。人の幸せって、そういうことだろうか。もっと目に見えないものなのではないだろうか。僕自身が貧乏暮らしをしたせいなのかな、優しさと思いやりとか、ありがとうって気持ち。そういう目に見えないものを大切に伝えていきたいと思っています。

世界最強の肉食恐竜ティラノサウルスと、小さな草食恐竜アンキロサウルスの赤ちゃんとの物語を描いているのも、強いことがすべてではないということを伝えたいから。ウルトラマンは強いけれど優しいし、ちょっぴりママが怖い。ウルトラマンシリーズは、お父さんたちへの応援歌になればと描きました。

今はデジタル化が進んで、子どもたちはゲームが大好きですよね。でもね、そのゲームは勝ち負けやスピードを争う刺激的な面白さ。デジタル技術の発達は、人間の考える隙間を奪っていく気がします。感性が吸い取られるというのかな。子どもの感性が奪われるということは、つまらない大人を作っていくことに繋がる。僕は強く危惧しています。



海外でも大人気。英語・韓国語・フランス語・イタリア語等に翻訳された絵本の一部



ティラノサウルスシリーズとウルトラマンシリーズ

先生も生身の人間

僕が子どもだった頃、しょっちゅう先生に叱られました。その度に、母親が僕を連れて、先生に謝りにいきました。先生は聖職だったのです。僕も6人の子の父親ですから、今の先生方のご苦労が痛いほど分かります。子どもを導くのは大変。手がかかる。文句を言う保護者も多いでしょう。でも敢えて、先生たちをお願いしたいのです。先生一人ひとりの生身の人間を子どもに見せてやってほしいと。

手間暇かけることは、そこに関係性や愛情を芽生えさせると僕は思っています。人間関係の面倒くささも含め、アナログな体験からしか得られない感性を、心の柔らかな子どもたちに育んでいただけたらと願います。

僕自身、先生の言葉や行動に影響を受けて大人になりました。絵を褒めてくれた先生たちのおかげで、絵が大好きになりました。高校の先生に美術研究所を紹介されなかったら、今の僕はないでしょう。子どもたちは今も昔も変わっていません。変わっていくのは、常に世の中と大人たちなのではないでしょうか。

今年67歳になります。展覧会や講演会に加え、映画公開や海外出張も入り、人生史上最高に忙しい一年になりそうです。頑張りますが、生身の人間には命の限りがあります。だからこそ、目に見えない大切なことを伝え続けていきたい。一緒に頑張りましょう。



読者の方から抽選で3名様に、宮西 達也さんによる直筆サイン入りトートバッグをプレゼントします。

応募は、はがきに①住所、②氏名、③電話番号、④ご所属の学校名(組織名)、⑤本誌の感想をご記入のうえ、以下の宛先までご郵送ください。

応募宛先：〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-4-6 (公財)日本教育公務員弘済会「きょうこう vol.43 プレゼント」事務局

締 切：2023年7月31日(月)必着

※当選者の発表は、トートバッグの発送をもって代えさせていただきます。

令和4年度 第28回 日教弘教育賞

最優秀賞の受賞校2校にインタビュー

「日教弘教育賞」は、公益財団法人日本教育公務員弘済会が行っている事業です。

教育関係者が使命感をもって日々行う教育実践の報告の場として、教育実践研究論文を募集し、学校教育の向上発展に寄与する優れた実践研究を対象に、助成を行っています。今回は最優秀賞2校の受賞論文およびインタビューを紹介します。

藍で繋がる伊達愛プロジェクト

— 「地学協働」を意識した地域と共に歩む学校づくりをめざして —

北海道伊達高等養護学校 校長 浅井 謙作

① はじめに

(1) 本校の概要

本校は、「伊達と言えば北の湘南!」で有名な北海道伊達市にあり、昭和56年4月に北海道で初めての職業学科の高等養護学校として開校した。現在106名の生徒が園芸科、窯業科、農業科、木工科、工業科、家庭総合科の6学科に在籍し、個々の特性を活かし卒業後に一般就労を目指す学校である。

以下、取組について論述していく。

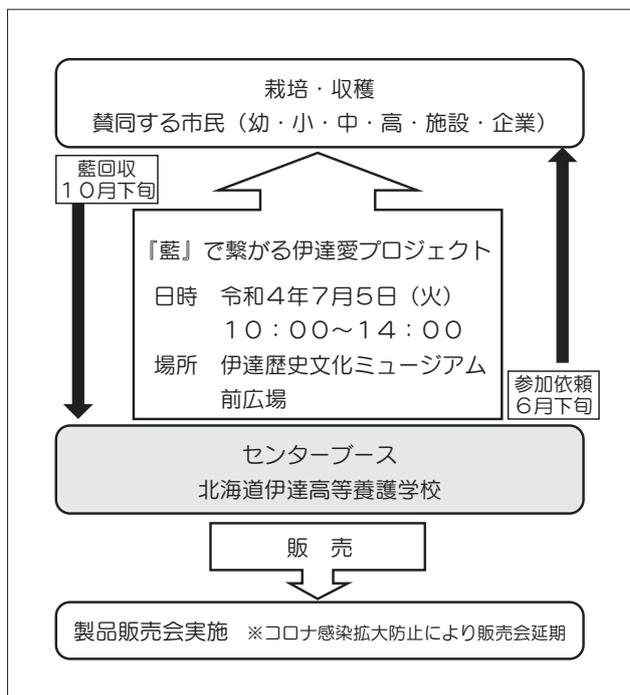
(2) プロジェクトの経緯

本校では、平成31年から伊達市の古き良き伝統や文化を知るために、伊達市の伝統工芸の一つである「藍染め」を研究してきた。そして先人の思いや技術等を少しでも伝承することで、本校の職業学科としての特性を活かして伊達市へ貢献することができ、伊達市の地域活性化の糸口に繋がるという思いの中で実践してきた。藍染めに関わる作業工程については、本校の教育課程上及び教場（農場）における藍の作業には限界があり、現状以上の作業（藍の生産性）を展開する困難さが課題となっていた。そこで、本校と伊達市がコラボレーションして藍の播種、そして苗を栽培から収穫、藍染めまで一緒に取り組むプロジェクトを立ち上げることにした。それが、「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」である。本プロジェクトは、趣旨に賛同してくれる伊達市民や幼・小・中・高校及び施設、企業等の協力を得て、各々が「藍を栽培、管理して育て収穫して本校へ届けてもらう」というものである。藍の播種からポット上げまでは、本校農業科と園芸科の生徒が授業で取り組み、希望する方へ藍の苗を預け育ててもらい、収穫できるころに本校へ持ち寄っていただくという「藍育（あいいく）ファンディング」の実施を考案した。これにより、藍の生産性は向上し安定した藍染め作業実施の材料が確保できる。さらに、生徒にとってより良い学びの機会となることだけではなく、学校と地域が一つとなり取り組むことで、伊達市の地域活性化の向上に繋がり、伊達市が掲げる「第2期まち・ひと・しごと創生総合戦略」にある3つの視点、①地域資源を生かした産業を育て雇用を生み出す②選ばれる「市民幸福度最高のまち」となる環境をつくる③生涯健康社会の実現、にも繋がると考えた。そして、将来このプロジェク

トを通して伊達市民の障害者理解が今以上に進み、本校生徒が伊達市をはじめ、一般就労の道を切り拓くことができれば、伊達市におけるノーマライゼーションの深化につながり、伝統や文化を伝承し伊達市が掲げる「2060年の伊達市『こころ』も『からだ』も健康に暮らせるまち 健康に暮らすなら伊達市」のビジョンに繋がるプロジェクトと考えて推進してきた。

今回、本校が目指してきたのは、地学協働をキーワードに地域の伝統文化の伝承というとても大きなものである。その中でも藍染めは化学染めではなく、本来の藍独特の色合いが出る自然発酵にこだわった。1年目は惜しくも失敗に終わったが、今年度2年目において見事成功にいった。これには多くの方々の御指導や御助言等サポートしていただいたからこそその結果である。特別支援学校による藍染めの自然発酵の成功は全国でも初めてのことで感じている。

今回はこの快挙でもある自然発酵の成功までの生徒と教師のプロジェクトをまとめた。



② プロジェクトの取組

(1) 藍育ファンディング

藍育ファンディングでは、クラウドファンディングの「その目的に賛同する人がお金を出资し、できた製品を返礼品としてもらうシステム」を活用し、本目的に賛同する市民等へ藍の苗を渡し収穫まで育ててもらおう。そして収穫時期に本校へ持ってきていただく。(もしくは取りに伺う。)その返礼品として、本校の製品を渡すというシステムを考案し、地域と密接に取り組める方法の一つとして進めた。

4月上旬、昨年度に播種した藍の苗を丁寧にバットから外し一つ一つポットへ移す作業から始め、7月の当日まで愛情込めて温室で育てた。また、藍の苗は、天候の状態を確認し5月に本校の農場に定植した。

生徒たちは藍育ファンディング本番に向けて、接客対応など事前学習を行い担当職員と確認しながら本番に向かった。

7月5日(火)伊達歴史文化ミュージアム前広場において「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」の藍育ファンディングを開催した。担当した3学年の生徒たちは、藍の苗約300ポットを無償で配付するブースと、各学科の製品(木工科のベンチ、園芸科のドライフラワー、窯業科のコップやお皿など)を格安で販売するブースを設営した。

開店と同時に市民が続々と集まり、藍の苗300ポットは1時間足らずで完売となった。市民からは、「みんなすごいね~ありがとう!」という声をいただき、生徒たちは達成感や充実感を肌で感じ、地学協働の大切さを学んだ。

(2) スクールキャラクターの取組

生徒会がこのプロジェクトを盛り上げようと、本校のキャラクターづくりを提案し、全生徒に呼びかけ「生徒会企画! スクールキャラクターの募集!!」を始めた。応募総数40作品を超える中から全生徒による総選挙が行われ、圧倒的投票数で見事選ばれた。「侍のサム」と、「藍のアイ」を繋げて名前を「サムアイ君」とした。今回生徒会が企画運営することで、生徒や先生方の中に一体感が感じられ、本校への帰属意識の高まりを感じ保護者や地域関係者の皆様からも高評価をいただき、生徒会執行部の生徒や担当職員も大変喜んでいて。決定後は、美術専科の職員により手書きデータからデジタル化された「サムアイ君」は、HPやのぼり、名刺、封筒などあらゆるところで使用され、今では本校のマスコットとして大活躍中である。



(3) 各学科の取組

本校には6学科があり、それぞれが藍で繋がるこのプロジェクトに参加し各学科の藍製品開発に挑戦している。具体的には下記のとおり。

①園芸科:藍の入浴剤や消臭ポプリの試作

園芸科では、刈り取り乾燥させた藍の葉や茎を細かく加工し、

10cm角の大きさの布の中に詰めて入浴剤や消臭ポプリとしての試作に取り組んだ。藍は大学の論文等では、疲労回復や抗菌作用等様々な効果が証明されていることを突き止め、改良に改良を重ね成功することができた。

②窯業科:藍色の焼き物の試作

窯業科では、藍の葉を釉薬に混ぜ焼いてみたり、藍の葉を粘土に混ぜたりと挑戦したが、どれも上手いかなかった。今のところ藍色の釉薬を使用した焼き物となっているが、現在も生徒と教師が日々研修し試作に励んでいる。

③農業科:藍の生葉染め、羊毛染めの試作

農業科では、藍染め液の作成が中心だが、それ以外にも生葉染めは、藍の生の葉と水をミキサーにかけ、そこに薬品を入れ一定の時間が経つとインジゴが生成され、本来の藍色ではなく綺麗な薄い水色に染まった。染めた布は生徒たちの主体的な取り組みの中でハンカチやコースターとして試作した。また、羊毛染めでは、ブローチやイヤリングなど生徒の斬新なアイデアを取り入れて試作中である。

④木工科:木材を藍染めしたベンチの試作

木工科では、木材を染める研修に取り組んでいたが、思うように染めることができなかった。何度も試行錯誤する中で、木材を熱湯にくぐらせると染まりやすいということが判明し、時間はかかったが、綺麗に染め上げることに成功した。

木工科では、地域の小学校から藍染めされたベンチの受注があり、デザイン重視ではなく安全性を第一に考えた新しいデザインは、生徒と職員が何度も検討を重ねた。例えば、染めた木材が服やズボンにうつるのではないかと、木材と木材の間に指や足が入ってけがをしないかなど、藍のベンチを作成する中で多くの気付きに触れることができ、主体的な学習への意欲も高まった。

⑤工業科:藍染め布を用いた金工カレンダー

本校の工業科作業学習ではコンクリート製品づくりがベースとなる。しかし、今回は各学科で藍を活用するというテーマのプロジェクトでもあるので「金工製品に藍を活用する方向で生徒と一緒に何ができるか」というところから話し合い、金工のカレンダーに藍をコラボすることになった。切り出された鉄板を加工し、藍染めされた布を置きその上から透明のアクリル板で挟み固定すると、またひとつ味違うカレンダーとなった。

⑥家庭総合科:藍のロックピスケット

家庭総合科では、学校祭でも大人気であるロックピスケットと



のコラボで進めることはすぐに決定したが、藍そのものが食べられるものなのかどうなのか、安全面を探ることから始めた。担当職員で手分けしながら調べ安全性を確保し、6学科最後になったが「藍(愛)のロック



ビスケット」として校内販売を実施した。購入した教師にアンケート用紙を配付しデータを集め製品開発に活かした。今回は乾燥葉を粗く砕いたりフ、ミキサーで細かくしたパウダー、藍の種を煎ったシードの三種類とした。今後はデータ分析からシードをベースとした新しい配合で再挑戦していく。

このように各学科が製品開発をすることで、生徒の主体的で対話的・深い学びの学習が向上し、職員と生徒の「難しいけど面白い。もっと挑戦したい」というモチベーションにも繋がっている。今後も引き続き斬新なアイデアを出しながら製品開発、試作に取り組んでいく。

(4) 返礼品について

1年目は、まだ藍染めの製品が完成していなかったため、本校の各学科の製品である窯業科の小皿、園芸科の入浴剤、農業科のポップコーンなどを返礼品として地域の皆様にお渡しした。今年度は、実際に藍染めした各学科の製品も増えてきているので、本校の自然発酵の藍染めで製品を量産し返礼品として、地域の皆様に少しでも還元していきたいと考えている。



(5) 道外の高校との交流学習の取組

1年目このプロジェクトを進める中で、教師から道内外で藍の取組をしている学校があれば交流学習をして生徒同士の繋がりを広めてはどうかと提案があった。そこで農業高校の教師の御協力もあり調べることができた。道内で藍染めに係わる取組をしている学校はなかったが、徳島の県立A高等学校が実際に藍を種から育て収穫し藍染めを行い、また、地元企業とコラボして地域活性化の一つとして取り組んでいることを発見した。そこですぐにその学校の校長へ連絡を取り事情を説明し交流学習をすることとなった。

令和4年1月18日(火) zoom回線を用いた遠隔による、徳島県立A高等学校との交流学習が行われた。はじめに両校生徒の自己紹介から始まり学校紹介があった。当日本校は雪が積もっていたので徳島の生徒たちは「すごーい!! 雪を見たいです!!」という場面もありリラックスしたムードで取りかかることができた。



本題の藍の取組については、本校から1年目の実践を説明。結果として自然発酵に至らなかったことを伝え終了した。次に徳島県立A高等学校の実践発表が始まると、記録をとる生徒、質問する生徒など積極的に関わろうとする姿が見られた。これはその場にいた教師も予想をしなかったことだった。

生徒自らが自分たちの取り組んだ藍の自然発酵が失敗に終わり、落ち込んでいる中での交流学習だったので、何故失敗したのか、原因は何か、どうすれば成功する可能性があるのか、次か

ら次へと質問が出された。徳島の生徒たちの、その一つ一つの質問に丁寧に優しい言葉でわかりやすく説明する姿は、まさしく本来の交流学習であり、時空を超えた素晴らしい交流学習となった。

終了後、生徒たちから担任へ話した言葉は、「僕たちは確かに自然発酵に失敗をしました。でも落ち込んでいる訳にはいかないし、これは失敗ではなく学びだと思いたいです。この学んだことを後輩たちに繋げたいと思



います。僕たちはあと少しで卒業しますが、先生なんとかして成功させてください」と委員長が話してくれた。感動した。このプロジェクトを始めるときには、こんなにも生徒たちが主体的に取り組むことはあまり予想していなかった。どちらかというと、教師が指示をしたそのとおりに生徒たちが動く、そんな活動が多いと予想をしていた。しかし、それがこの一年間取り組む中でこんなにも生徒たちが考え悩み行動し、上手くいかず失敗して落ち込みを繰り返し、それでも最後には後輩のために、なんとか成功させたい思いを担任へお願いをする。そんな成長を目の当たりにできたことは、藍の自然発酵の成功よりも、もっと大事なものを学びとれたことだと思った。

③ 実践の成果と可能性

中央教育審議会は平成27年12月に、「新しい時代の教育や地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働の在り方と今後の推進方策について」「チームとしての学校の在り方と今後の改善方策について」の各答申をまとめた。そこには地域との連携については従来から「開かれた学校づくり」として進められてきたが、「地域とともにある学校」はさらに一歩踏み込んで、地域の人々と学校が教育目標やビジョンを共有して、一緒にパートナーとなることを求めている。また、北海道教育委員会では、地域学校協働活動を「地学協働」と造語化し、地域と学校が相互にパートナーとして連携、協働する活動を積極的に展開し、地域と学校がWin-Winの関係を構築することが求められ、地域のあらゆる方々と繋がりが参画を得て、地域全体で子どもたちの学びや成長を支えるとともに「学校を核とした地域づくり」を目指して、地域と学校が相互にパートナーとして連携・協働して行う活動としている。

今回、本校が取り組んだ「藍で繋がる伊達愛プロジェクト」は、こうした背景を基に伊達の伝統工芸の一つである藍に焦点を当てた。このプロジェクトを通して高齢者、成人、学生、保護者、民間企業、障がい者施設等様々な幅広い地域住民等の皆さんと繋がることで、本校のプロジェクトを知っていただける機会だけではなく、伊達市の伝統工芸や文化、伊達市が進める「だて学」を振り返る機会となった。学校教育目標や伊達市が掲げる「2060年の伊達市『ころも』も『からだ』も健康に暮らせるまち 健康に暮らすなら伊達市」のビジョンに繋がりを、さらに地域と学校がWin-Winの関係となっていく可能性が非常に大きいと考えている。

④ おわりに

このプロジェクトを通して改めて学んだことは、学校内で完結

している学習からの脱却ということだった。地域に足を運び地域を一つの教場として捉え、地域で活動する中で、多くの地域の方々と関わることで、学校教育はこれで大丈夫か、ずれていないか、遅れていないかなど、点検、発見、改善等様々な視点を学ぶ機会となった。地域住民や保護者が学校運営に参画する「コミュニティー・スクール(学校運営協議会)」の推進が挙げられている中、本校もコミュニティー・スクールを今年度から設置し、多くの御助言をいただきながらこのプロジェクトを進めてきた。こうした社会や地域の繋がりの中で学ぶことで、生徒たちは、自分の力で人

生や社会を少しでもよりよくできるという実感をもつことができ、「よりよい学校教育を通してよりよい社会を創る」という大きな目標へ繋がっていくと確信している。

今回、藍の自然発酵に成功し、プロジェクトを進める中で一定の成果が得られているが、まだまだ課題も多くある。この課題一つ一つにしっかり向き合い、生徒、職員、そして地域が楽しみながら考え悩み、ワイワイしながら多くのことを学び合える、そんなプロジェクトになっていけるように引き続き学校としてできることを全力で取り組み探求し続けていく。

浅井校長へのインタビュー

受賞されたご感想や、今回の経験で得たものについて教えてください。

電話で結果を聞いた時、喜びや感動を飛び越えて人ごとのように感じました。電話を切った後、教頭、事務長に報告したあたりから徐々にすごいことなんだと思うようになりました。確かに自分が書いた論文ではあるけれど、先生や生徒たちが地道に実践してくれたことがとても嬉しく、その一つ一つの実践をまとめて書いただけとしか考えていませんでした。

今回の経験から得たものは、「仕事は楽しく！ 学習も楽しく！ 楽しくなければそこに学びはない」という考え方もありません。

地域と共に歩む学校づくりを目指し、地学協働をキーワードに「藍染め(藍の自然発酵)」など地域の伝統文化の伝承に取り組む中で、何がポイントになったとお感じですか？

ポイントとなったことは、「校長自ら地域へ足を運ぶ」ということです。

学校から10分程度の場所に伊達市の道の駅があり、時間があればそこへ顔を出すことができました。地域の人やこの場所に来る人たちは、伊達の何を購入するのかなど見ている中で、藍の製品にも注目していました。藍染めの製品は数多く売られていますが、その値段を見ると誰もが購入するという金額ではなく、良い製品=購入したいとはならない場面を見て、「せっかく伊達の藍染めなのに購入者が少ないのは残念」と思いました。その時いくつかのキーワードが頭の中に浮かびました。「藍染め」「地域との関わり」「作業学習」「障がい者理解」などのキーワードがつながり始め、伝承していくためのヒントが浮かんできました。

研究を進める上での課題や苦労した点、工夫した点を教えてください。

地元の藍農家のお話を聞く機会があり、藍染めの自然発酵はとても難しく、そう簡単な挑戦ではないこともわかりました。その藍農家さんが「一生懸命取り組み、その結果失敗したとしても、そこからまたたくさんの学びが生まれますよ」と話してくれました。その一言に、「これは学校として、先生と生徒の取組にしていきたい」と私の心に火がついた感じがしました。

学校としてプロジェクトにしていくためには、より具体的な目標やこれに取り組むことで何を目指すのかなど、プレゼンテーションの回数がとても多くありました。今振り返ると、この

プレゼンテーションが成功していったから、このプロジェクトが上手くいったのかもしれませんが。

研究を通して、先生や生徒のみなさんにどのような変化がありましたか？

大きな変化があったかと言われると、特にない感じです。しかし、生徒や先生たちに今回の受賞を報告する中で私が一番伝えていることは、「生徒と先生たちが一生懸命取り組んでくれた実践について校長がそれぞれをまとめて書いただけであって、すごいのは校長ではなく、生徒・先生一人一人の力の結晶です」ということでした。この思いが、少し時間が経って実感に変わってもらえれば幸いです。

実践の深化を期待したいと思いますが、今後の展望などありましたらお聞かせください。

このプロジェクトは令和5年度が3年目となり、まとめの年度となります。課題もまだまだ多くあり、藍の自然発酵も安定期までは至っていません。ある意味勝負の1年となると思います。「挑戦することをやめない」「失敗を学びに変える」「常にワクワク楽しく取り組む」そんな1年を過ごしていけば、結果は自ずとついてくると思います。また、そうしていくことで斬新なアイデアが生まれ、このプロジェクトに深みが生まれてくるのかもしれませんが、これからもワクワクしながら、それぞれの強みと弱みを尊重できる生徒と先生たちで盛り上げていきます。



表彰式の様子。「本気の挑戦に失敗はない。あるのは成功か学び」という浅井校長。「先生と生徒全員の受賞です」と笑う

対話の質を高める授業構成と言語化の見取りで、 深い学びの扉を開ける生徒の育成

— 思考により生まれる内なる言葉を外言化することの重要性に着目して —

鳥取県鳥取市立桜ヶ丘中学校 校長 音田 正顕

① はじめに

「深い学びに導く授業とはどういうものか」「内部で深まった学びをどう見取るのか」「基礎基本も定着しづらい現状では、深い学びへの到達は困難ではないか」。

3年前、新学習指導要領の全面実施を前に、職員から多くの疑問が挙げられた。さらに、新型コロナウイルス感染症の拡大で対話的な学習に条件が付き、慎重を期した中での授業実践は、様々な点から従来の学び方を見直さなければならない必要性に迫られていた。

② 主題設定の理由

学びに対する興味・関心の希薄さや、受験終了と同時に剥落する「知」の危険性は、日本の教育の危機とされてきた。本校でも、個人で習得した知識・技能を活用して仲間と共に発展させる活動や、「わかった、できた」という達成感に加えて更に新たな問いを立て、探求しようとする姿には至っていなかった。そこで、深い学びのきっかけになると考えたのが、「思考と表現の間にある生徒の気づきや学びを見取る」ことである。

本校の特色として、校区の全小・中学校で取り組む短時間グループアプローチが挙げられる。これは人間関係づくりを目的としたスキルの醸成と、自分に向き合う時間を週1日終学活に10分間だけ取る活動であるが、7年目を迎える実践の積上げにより、意見交流に抵抗感が少なく、誰もが思いを話せる強みに繋がっていた。これを授業に生かし、対話を重視して学びを深める「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」という本校の学習スタイルが生まれた。授業の本時目標を達成するために、どのような学習の手立てを重視するかを「態度目標」として示すことにより、生徒同士の対話や学び合いを意図的に取り入れる学習の型である。生徒の関心や意欲は高まり話し合いは活発になったが、学力の定着や深まりについては効果が実感できないまま試行錯誤を繰り返していた。その打開策として研究の柱としたのが、「生徒の思考した言葉（内なる言葉）を、誰か（何か）に表現する（外言化する）、その過程に着目する」授業構成である。

既にある「話し合いの土台」を基に、話し合っている内容のレベルを教師が丁寧に見取り、話し合いの精度をどう高めていくかを各教科で研究することとした。

本研究は、「①学びを深めるための授業の構成」「②①を実現するためのタイムマネジメント」「③学びの深まりを見取る方法」の三つを柱として進めていった。



グループで和やかに意見交換する生徒

③ 研究の構想

(1) 授業構成

本校では、以下の展開で授業の型を構成していた。

桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング[従来型]

- ①「目標・授業の流れの提示」
- ②「個別の取組」
- ③「グループでの取組」
- ④「全体交流や評価問題の実施」
- ⑤「振り返り」

単にグループ協議するだけでは、話し合いに深まりを欠き、表面的な活動に終わってしまう。また、十分に吟味した発問であっても、深まるかどうかはグループの力量に左右されることが多く、学級全体として目標に到達できないこともあった。この解決策として、一度の話し合いで学びを深めようとせず、最初の協議を深めるために二度目の話し合いを設け、学級全体で一つの課題を追求していくことにした。従来型の④で全体交流を行った後に、学びを深めるための活動を加え、全教科共通の「改定型」を以下のように示した。

桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング[改定型]

- ①「目標・授業の流れの提示」
- ②「個別の取組」
- ③「グループでの取組」
- ④「全体交流の実施」
- ⑤「グループでの取組（④を深める）」、作品制作など
の場合は「個別の取組（自身による再考、発展的・挑戦的な制作、④を深める等）」
- ⑥「二度目の全体交流や評価問題の実施」
- ⑦「振り返り」

従来型は主として「知識・技能」「主体的に取り組む態度」を養う授業の型とし、改定型を「思考力・判断力・表現力等」を養う授業の型とすることにした。

(2) 二度の話し合いを持つために

対話的な活動を入れても、結果を全体発表するかしないかの内に時間が終了してしまうということがあった。それを二度の話し合いを行い、発表し、さらに振り返りを行うとなると、学習時間をどう調整するか戸惑いの声が聞かれた。そこで、一単位時間に二度話し合うための時間確保の仕方を全体研究会で提案し、研究グループを組んで協議を重ね、実践していくこととした。

(3) 学びの深まりの見取りについて

「〇〇を頑張った」、「〇〇について分かった」、という振り返りは生徒の意欲や達成感の面では注目すべき点であるが、客観的な評価とはなりにくい。そこで、「振り返りに何を書かせるか」「何をどのように説明させるか」「目標達成のためにはどのような発問が必要なのか」等について教材研究を深め、評価につながる表現方法や表現内容の見取りを教科ごとに明確化した。

4 実践事例

(1) 桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング[改定型]の実践

実践例1

【社会】アフリカ州「アフリカが抱える課題とその解決につながるための取組」

目標「貧困問題の解決策を考える活動を通して、アフリカの自立は世界全体で取り組む課題であることを学ぶ。」

【思考・判断・表現】

授業の流れ

- ①目標の提示「アフリカの課題に対して、どのようなことに取り組んだらよいか考える。」
- ②個別の取組「貧困から抜け出すために必要なことは何か考えよう。」
- ③グループ学習「自分の考えを班で共有しよう。」
- ④発表「③の発表」
- ⑤グループ学習「③の発表を元に、パートナーシップの視点からどのようなことができるのか考えてみよう。」
(飛躍点)
- ⑥発表「⑤の発表」
- ⑦振り返り「今日の授業で学んだこと、もっと調べてみたいこと」

実践例2

【国語】表現を見つめる——「走れメロス」

(2) 二度の話し合いを持つためのタイムマネジメント

目標「観点を立てて作品を分析し、物語の展開や人物像、表現の工夫が作品の魅力につながることを学ぶ。」【思考・判断・表現C読むこと(1)エ】

授業の流れ

- ①目標の提示「作品の魅力を分析し、伝えることができる。」
- ②個別の取組「観点ごとに、作品の魅力を分析しよう。」
- ③グループ学習「考えを班で共有しよう。」
- ④発表「③の発表」
- ⑤個別学習で④を深める「紹介された意見を参考に、作品の魅力を整理して文章にまとめよう。」(飛躍点)
- ⑥発表「⑤の発表」
- ⑦振り返り「今後、他の作品を読むとき、どのような観点に着目して読むとよいか。」

—単位時間の授業で、二度の話し合い、もしくは作文やレポートを完成させ、さらにそれを発表して振り返るためのタイムマネジメントとして、以下の点に留意して授業を展開した。

①個別の取組を十分に

個別活動の時間を確保し、ワークシートやノートにあらかじめ自分の考えを書かせる。

②一度の話し合いは、基本5分以内に

二つの資料を読み比べてそれぞれ分析する場合などでも最大7分以内を目安とする。

③ホワイトボードには結論(キーワード)のみ

細かな理由や発表の原稿、資料の引用等は書かない。

④発表順は教師が意図を持って指名

教師は話し合いの時点で、おおよその内容を把握しておく。二度目の発表は時間次第で数組に絞り、残りは掲示に留める等の工夫や配慮を行う。

⑤司会者指導

授業の流れ、司会者の役割、留意点などを確認する。

(3) 「飛躍点」の設定による学びの見取り

「教科会や教材研究の重要性を再確認する中で、教師は単元や授業において生徒の思考を集中させ、深めるポイントを掴むことができるようになる。」本校研究の助言者から、そのポイントを『飛躍点』と称し、タイミングを逃さずに適切な指示や発問を行い、対話的活動を入れて思考を深めさせるよう指導を受けた。また、生徒が短時間に集中して思考した内容を、どのように言葉として表現しているか(内言の外言化)に意識を置くようにした。話し合いの内容やまとめ、発表など、生徒が自分の考えを言語化した元の内容を類推することで、教師が現状のレベルを見取る感度や精度が向上した。教師は、生徒が問いに対して書き表す文章や発言以上に大量の思考をしていることを認識すべきであり、その内なる言葉を目的に応じて整理し、表出させることが深い学びの入口に立たせる鍵になると考えた。

(4) 一人一台端末の活用

個人の意見を班へ素早く反映させたり、一気に全体共有したり、多くの意見を集約するなどの目的のため、タブレットを有効に活用することとした。



Jamboardで「具体」と「抽象」に分類していく(国語)

5 成果と課題

(1) 桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング改定型

①社会「アフリカが抱える課題とその解決につながる取組」

「アフリカの課題に対して、どのようなことに取り組んだらよいか考える」という目標に対し、一度目の話し合いでも「食事と安全な水」「家」「教育」など、複数の提案があったが、この段階では課題解決に必要なものを得る方法や、事象と事象との関係性までは言語化できていない。また、「貧困じゃない人が手助けをする」などパートナーシップに言及する意見もあるが、「貧困

じゃない人」とは誰か、どんな支援をするかなどは明確にはなっていない。そこでパートナーシップに着目してさらに何ができるか話し合わせると、「他国からの支援」「輸出」など意見がより具体化されると同時に、アフリカ州のみに置かれがちだった視点が、世界経済や国際交流など、よりグローバルな視点に広がっていった。

話し合い①

課題解決のために何が必要?	理由
頭を絞って必要なことを限定して自分の考えを表現する	いろいろな意見が飛び交うから
質問したい人があつていい	1人でも多くの人に自分の考えを伝えることができるから
1人1人バネ物、金	お金はバネ物で買えない物だから

↓

話し合い②

★アフリカが抱える課題を解決するにはどんなことが必要か、自分の考えを記入しよう!

経済成長した他国からの金銭的支援
 輸出品の輸出を促してそこからアフリカ自国で
 発展していく。これは他国に依存する環境水は
 必要。他国とも協力していろいろな知識が必要

生徒用ワークシート：箇条書きから文章へ発展

まとめでは、「さまざまな支援」など抽象的な理解ではなく、「経済成長した他国からの金銭的支援」など、思考を具体的に言語化した記述が92%、支援だけでなくアフリカの自立に関わる内容にまで言及した記述が84%あり、学びの深まりが見られた。あらかじめ「パートナーシップ」について示しておくのはどうかとも協議したが、生徒の思考には順序があり、初めから広い視野で考えられる生徒は限られている。学級全体で深い学びに到達するには、二段階で順を追って進行していくのが効果的だという結論に至った。

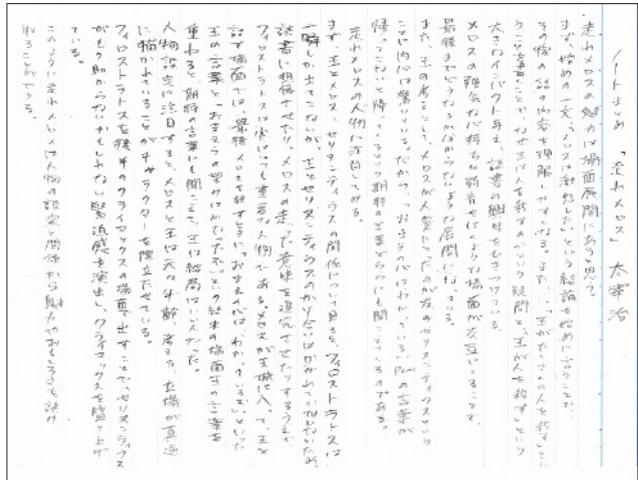
②国語「走れメロス」

作品の魅力については「場面展開」「表現の仕方・文体」「主題」「語り手」「人物像」などの観点を置き、フォームで投稿して共有した。

場面展開	<ul style="list-style-type: none"> ○ピンチもなくそのまま間に合うのではなく何か山場を作ることでもた、読者を最後まで引きつけることができる。 ○話の切り出し方が急で「メロスは激怒した。」から始まるので読者に「何っ」と思わせることができ、次のストーリーに興味を持たせる事ができる。 ○妹の結婚式のなごやかさが後の激しい展開を引き立たせる
表現の仕方・文体	<ul style="list-style-type: none"> ○眉間のしわは刻み込まれたように深かった→王の怒りを感じる→王の心の孤独 ○走るメロスのスピード感ある書き方が、読者も一緒に走っているような気持ちにさせる。ハラハラして、体ではなく心がストーリーの中を走っているような感じになる。 ○「なまいきなことをいうわい。」から後に続く表現で王の邪悪さやサイコパス感、人を信じることのできない気持ちがわかる。
人物像	<ul style="list-style-type: none"> ○メロスに子供がいたら行動は違うと思うので、独り身の設定はとてもいいと思います ○メロスと王の立場や年齢、考え方が真逆で、その設定がキャラクターを際立たせている。 ○フィロストラトスは一瞬しか出てこないけど、描かれていない「王とセリヌンティウスの三日間」を想像させたり、メロスに走る意味を深く考えさせたりするうえで、実はとても重要で、欠かせない人物

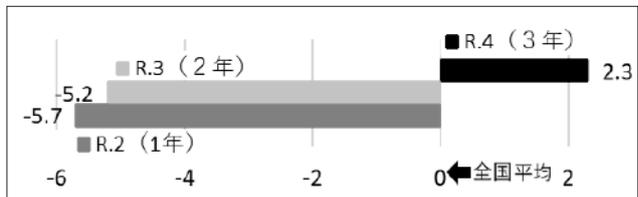
観点別作品分析のまとめ(一部抜粋)

この時点ではまだ箇条書きで、表現も拙い。そこからさらに任意に二つ以上の観点を選択し、ひと続きのまとまった文章として、20分程度で書きあげていった。



「走れメロス」の魅力について論じた生徒のノート：ノルマはノート半分以上、1頁以内。7割の生徒が1頁近く一気書き上げた

以上のように振り返りやレポートを書かせることに重点を置いた活動を継続していった結果、令和2年度入学時点では、教研式標準学力検査の「書くこと」領域で全国平均から5.7ポイントのマイナスだったが、令和4年春には2.3ポイントのプラスに転じた。



NRT 国語「書くこと」領域集計 全国との比較

(2) タイムマネジメント

- ①「個別の取組を確保」することが、最終的には時間短縮につながった。早くグループ活動に入らせたいという焦りもあるが、考えがまとまっていなくて、結局のところ話し合いそのものが進まず、深まっていかなかった。また、生徒たちは個別活動のあとにグループでの話し合いがあることや、この段階でしっかりと取り組んでおかなければならないことを理解していたため、話し合いは意見を集約することに集中できた。
- ②「基本5分以内の話し合い」は、当初は時間が足りず苦しい印象があったが、教材の難易度に応じて発問や協議問題を工夫することで、短時間で濃密な意見交換を行うようになり、5分以上の設定をすると却って時間を持て余すようになった。コロナ禍における近距離でのグループ活動を短時間とすることは、話し合いによる感染の不安が軽減されるメリットもあった。
- ③「結論のみのホワイトボード」で、詳しい説明を書くことだけに終始したり、できる生徒が発表原稿を書くだけ、という状況を回避したりでき、話し合いの時間確保につながった。一方で、ホワイトボードが意見集約のツールであり、書

けていることが発表準備完了の目安となっているが、更なるスリム化のためには道具に頼らない口頭での発表も検討したい。これは意識の高まりと、発表技能の向上が前提条件である。

- ④「発表順の指示」で、関連した意見を続けて発表させたり、内容の深まりに応じて順を組み替えたりすることで、よりよい理解につながった。また、二度のうち必ず一度は発表できるようにすることで生徒の発表意欲も維持できた。
- ⑤「司会者指導」により、流れを十分に理解して話し合いに臨むことができる、司会者同士が協力して授業を良いものにしようとする一体感が高まる、司会者が意欲と責任を持って授業に取り組むことができる、という雰囲気醸成され、話し合いが充実した。

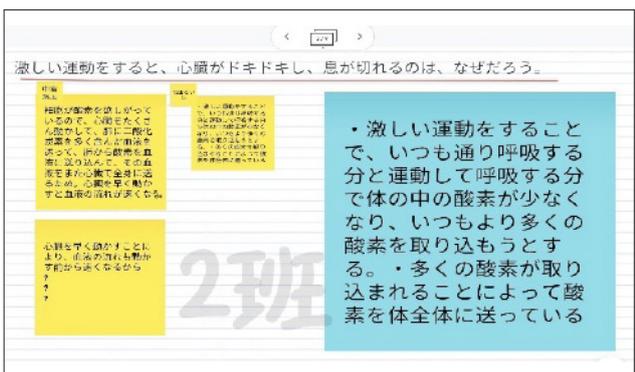
(3) 飛躍点の試行と「深い学び」につながる振り返り

観点を明確に指示し、学びの深まりが具体的に記録される振り返りやまとめを目指した。以下に、目的が達成されたと推察される振り返りの実際を示す。

<p>【国語】</p> <p>○質問で相手の思いや考えを引き出すには、話し手から出てきた言葉やキーワードから関連付けて質問したり、話題になっていることをきっかけにして面白さを聞いたりすると考えを引き出せると思った。</p> <p>○話をつなげていくことで、その話の本質を知ることができると分かりました。話してくれたことをつぶしてしまわず、広げていくことで、深く知ることができるのではないかと思います。</p>
<p>【保健体育】</p> <p>○お尻を上げたら前に出やすくなりました。しかも、下を向きながらスタートできるようになりました。</p> <p>○強く速いパスは通ったけど、遅いパスは通らなかったの、速いパスを出せるようにしたいです。</p>
<p>【理科】</p> <p>○人間がけがをしたら、皮膚が破れることがあるけど、植物は細胞がなくなっても成長点を保護する根幹となって、自分の成長を支えていますすごいなと思った。</p> <p>○水を電気分解することができる考えた人はすごいと思ったし、私たちの生活に結び付いているなと思いました。SDGsにも貢献できるなと思いました。</p>

(4) タブレットを活用した話し合いと意見集約

Jamboardを話し合いに活用した事例では、意見の視覚化がスムーズであったと同時に、個の意見を集約し、班全体の意



個人の意見を左に、集約した後の班の意見を右に大きく色分けして示す(理科)

見として集約される過程が可視化された。グループ協議のあと、全体の意見集約としてGoogleフォームを活用した事例では、より多くの意見が短時間に集まり、通常の授業では紹介されにくい一人ひとりの考えも、全体に対して反映されやすかった。一方で玉石混交の情報が整理されないまま集まると、情報の取捨選択に苦勞する生徒の姿も見られた。



オンライン授業(数学)

⑥ おわりに

本研究は、コロナ禍にあっても生徒の学びを止めない点を考慮し、深い学びに導く手立てについて全職員で研究協議し、実践した一考察である。「活動あって学びなし」と言われることもある対話を重視した学習について、これまでの授業を見直し、新たな観点で三つの方策を立て、思考力・表現力の伸長を期する授業づくりを目指して全教科で取り組んだ。

深い学びにつながる授業を構築するためには、何より教材研究が重要である。しかし、若手教師も増える中、独自のやり方でよりよい授業を継続して行うのは負担も大きくなる。全校体制で「型」となる学びのスタイルを構築し実践することを通して、教師にも生徒にも定着していく中で目標の達成が積み上げられ、学びの質の向上を実感できるようになった。特に、生徒が頭の中で思考している内容をどのように表現しているかに着目して指導することで、生徒は自分の考えを誰かと共有したいと思うようになり、表現を工夫することの意義や面白さを認識するようになっていった。また、教師の生徒理解の感度も高くなり、教師と生徒間の信頼度と呼応して良い意味の緊張感が生まれ、授業の目標を達成しようとする雰囲気が高まって、授業の満足度も上がっていった。

今後は、思考と表現の間の言語の往還をどのような根拠を持って見取り、評価していくかを掘り下げ、各教科の見方・考え方を基盤にして、生徒が深く学ぶことの意義をさらに感じられるような授業づくりを目指していきたい。



音田校長へのインタビュー

受賞されたご感想や、今回の経験で得たものについて教えてください。

桜ヶ丘中学校では、ここ数年間にわたり、「桜ヶ丘版アクティブ・ラーニング」をテーマに校内研究を続けて参りました。学習指導要領に明記されている「主体的・対話的で深い学び」をどのように捉え、日々の授業にどう反映させていくかについて議論し、一つの道筋を見出して校内全員で実践したことをこのように評価していただき、大変光栄に存じます。鳥取県は全国で人口が一番少ない県であり、この小都市の平凡な学校の取組が最優秀賞を受賞できたことは、県内は元より全国津々浦々の、どの学校にも同様のチャンスがあると証明したことになるのかな、地方の普通の学校の職員と子どもたちが方向性を一つにして取り組んだことが評価を受ける、そういう意味で、少し自信を持って学校教育を行ってもいいのかな、と思うことができるようになりました。

深い学びのポイントとして「思考と表現の間にある生徒の気付きや学びを見取る」ことに着目されたのはなぜでしょうか？

本校では、人間関係づくりを目標に短時間グループアプローチに取り組み、思ったことをクラスの誰とでも気兼ねなく話せるスキルを学び、学習にも連動させる土壌を育ててきました。その雰囲気の良いは、主体的・対話的な学びの姿勢に表れることは確信を持っていましたが、「活動あって、学びなし」と言われるように、ただ楽しく和気藹々と話しているだけでは学力の定着や深い学びに近づけないのではないか、という課題を克服できない状況にありました。令和2年度の校内授業研究会の際、指導助言の先生にいただいた、「内言の外言化」という言葉にヒントを得て、今回の受賞に結び付く授業改善を目指すことになりました。毎時間の振り返りで、2行、3行しか感想を書かない子どもたちも、そこに至るまでには、何倍もの内なる言葉を駆使して考えている。至極当たり前のことですが、指導を受けるまでは、その部分をあまり重要視していなかった現実がありました。生徒から表出された言葉や文章を評価対象としていた私たちは、その内なる言葉を整理させたり、考えの過程も含めてもっと思うように表出させたりすることができれば、表現も豊かになり、考えの根拠になっている部分や結論に至るまでの過程も共有することができ、授業が白熱し、学びが深まっていくと考えたからです。

研究を進める上での課題や苦勞した点、工夫した点を教えてください。

『思考から表現に至るまでの言語活動を、どのように表出させるか』という課題に対して、各教科でどう授業を展開していくか、具体的にタイムマネジメントした授業の型を提案し、教科の特性を生かして実施できるよう工夫しました。特に教科会を大切に単元構成を練り直し、数時間に1コマ、1時間の内の数分でも、深い学びに繋がる思考・判断・表現の資質を高める授業になるよう心がけました。

研究を通して、先生や生徒のみなさんにどのような変化がありましたか？

目標設定の改善や生徒に付けたい力の明確化によって、授業が適度な緊張感と期待感で満たされる時間となり、「今日は何を学ぶのか」を意識して取り組む生徒が増えた結果、授業後の振り返りに質的な変化が生じるようになりました。授業への集中度が高まり、生徒同士が認め合ったり励まし合ったりする姿も増えてきました。学期末の授業満足度や理解度等、生徒の授業に対する評価が上昇し、保護者からの信頼度も上がったことで、教師が安心して授業に臨むことができ、より生徒を満足させようと教材研究を工夫する意欲が高まってきたように感じています。

全国に同様の課題を持った先生方がいらっしゃると思いますが、メッセージがあればお願いします。

本校で取り組んだ実践の目指すところは、生徒の思いと教師の思いの往還です。生徒同士、教師同士、そして生徒と教師の思いの受け渡しに障壁が少ないほど、学習効果が大きくなるのだと思います。私たちも、未だ研究の途上ではありますが、時間をかけて生徒の内なる言葉を引き出すことで、生徒の考えや視点は広がっていき、学びの本質に近づくことができると考えています。教師もそうした生徒の期待に応えるべく、さらに教材研究を重ね、授業の質を上げることで生徒はより授業を楽しみにするようになる。そうした連鎖が起きよう、今後もなお一層の研鑽を重ね、引き続き努力して参りたいと存じます。

全国で日々真摯に生徒に向き合い、同様の課題を感じておられる先生方の中で、お一人にでも本校の実践を参考にしていただき、生徒の変容や先生の教材研究の手応えに繋ぐことができれば幸いです。



表彰式の様子。晴れやかな笑顔の音田校長と研究部の先生方

は ら す す む
原 晋 氏

オンライン講演会
ダイジェスト報告



(公財)日教弘の創立70周年記念事業として、3月17日(金)に特別講演会「箱根駅伝から学ぶ人材育成術～ポジティブな指導の仕方～」を開催しました。当日は青山学院大学陸上競技部長距離ブロックの監督である原晋氏をお迎えして、サラリーマン時代のビジネス経験を活かした強いチームづくりや選手の指導・育成方法についてお話いただきました。

「箱根駅伝も大学教育の一環と考える」「組織づくりに必要な要素は、理念・行動指針・ビジョン・具体的施策・評価基準。そして熱量、覚悟」と語られ、最後は「正しいメソッドをベクトルを合わせて伝える、情熱をもって取り組むことで必ず学生は伸びてくる。能力差はあっても、個々の能力の半歩先を目指していけば充実が図れる」というメッセージで締めくくられました。また、講演後の質疑応答の時間では多くの質問が寄せられ、大盛況のうちに終えることができました。

今後も、当会は教育に携わる仲間の「たすけあいの輪」を広げるとい創立の理念のもと、「最終受益者は子どもたち」であるように、更なる事業の充実と発展を目指してまいります。

引き続きご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

心に残る子どもたち

「自分が主役」の学校

むらかみ

村上 ゆかり

山形県山形市立第四小学校 校長



「卒展にいらしていただけますか？」
教え子から、大学の卒業制作展覧会の案内が届いた。小学校卒業以来の連絡であり、芸術方面に進んだことも知らなかったのが、驚きが大きかったが、会場に足を運んだ。10数年ぶりの再会で、容姿を手がかりに本人を見つけることはできず、パンフレットを片手に作品を探すと、遅しく成長した彼が挨拶してくれた。素人の自分でも、高い専門性をもって仕上げた作品であることが理解できる。「今日の案内が嬉しかった。好きなものをずっと持ち続けてきた成果だね。」と話すと、意外な答えが返ってきた。「図工や美術はずっと好きだけれど、学校の成績は良くなかったんですよ。もっというと、中学校ではいつも作品を仕上げられずに、評価は想定外でした。」隣にいた友達が「構想を形にするのに、時間がかかるのは昔からだったんだな。」「一人の空間じゃないと作業できないし。」確かに、そういう姿があったことを思い出した。ひらめきやアイデアは光るものが多いが、時間内に考えをまとめたり表現を完成したりすることが苦手だったこと、集団の中では自分の思いを出せずにいたことも多かった。「小・中学校では、時間と集団活動に苦しめられました。」笑いながら話す言葉に、これまでの自分の教育活動に大きな疑問を投げかけられたように感じた。

「時間を守る」「みんなで協力して」どちらも日常的に使っていた言葉である。もちろん、その

大切さは変わらないと思うが、その言葉で見えなくなっていたものに自分は気づいていなかった。「一人一人の思い」や「その子らしさ」。今の学校において全職員で大事にしようとしていることである。もやもやした気持ちのまま会場内を巡っている私に、彼が追いついて言葉を続けた。「でも、全校図工の日があったから、今まで続いたと思うんです。」「1年に1日でも、思い切りやれる日って嬉しかった。」彼と過ごした小学校には、全校で造形活動に取り組む日があり、学年ごとのテーマにそって制作した後は、たっぷり時間をとって鑑賞を楽しんだ。「小学生の時は、いろんな人がいたけど、みんな主役になれる日がありましたよね。全校図工の日は、今日と同じくらい、ぼくが主役でした。」学びの基礎を培う小学校生活においては、いろいろな力を偏りなく身に付けることが求められる。だが、それと同じもしくはそれ以上に、自分の思いを全力で表現したり取り組んだりすることができ、そのよさを友達から認められることが、成長の大きなエネルギーになることを改めて学んだ日となった。

今、子ども・教職員全員にとって「自分が主役」となれる学校を目指している。

可能性は無限大

いわさき せいじ
岩崎 誠司

兵庫県立飾磨工業高等学校(多部制) 教諭



『福岡ソフトバンクホークス 岡植純平 投手 飾磨工業高校』、2022年10月20日プロ野球ドラフト会議で福岡ソフトバンクホークスから育成5位指名を受けた。3年前はドラフトに指名される選手になるとは夢にも思っていなかった。

2020年4月、私は前任校から異動になり、飾磨工業高等学校に着任した。本校は全日制課程と多部制課程があり、私は多部制3部の軟式野球部顧問と多部制1・2部の硬式野球部のコーチになり、後にドラフト指名される岡植純平という生徒と出会う。最初の印象は、足は少し速かったかもしれないが、それ以外で印象に残ることはほとんどなく、自信もない感じであった。中学時代に投手経験があったため、投手をしてみないかと尋ねたところ、「自分はそのまで球速があるわけでもないし、自信もないのでやめておきます」と答えるほどだった。1年次の頃は、大会でベンチ入りもできず、スタンドで応援や大会補助員をしていた。しかし、日々の技術練習やトレーニングの積み重ねもあって、身体は大きくなり、プレーにもスピード感が出てきた。私は休日しか練習を見ることができなかったが、見るたびにもの凄いスピードで成長していく姿には、目を見張るものがあった。冬季練習で部内の体力測定を行った時には、先輩達の数値を超えてチームトップクラスにまで昇り詰めていた。「もしかしたら自分ももっとできるのではないかと自信を持ち始め、2年次になった春からは投手として本格的に練習を

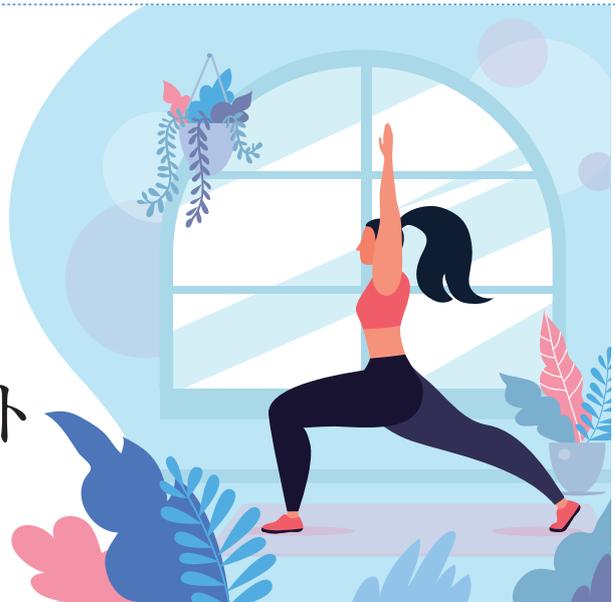
始めた。その段階でも、私は彼がプロ野球選手になるとは全然思っていなかった。卒業後も次の進路先でじっくり時間をかけて練習を続けていけば、もしかしたら…というくらいでしか考えていなかった。しかし、彼のたゆまぬ努力が結実していき、凄まじい成長曲線を描き、いつしか数多くのスカウトの方に見に来ていただけるくらいのトップクラスの選手にまで成長していった。最後の大会は、後に甲子園出場を果たす兵庫県立社高等学校と対戦し、3-5と惜敗。あの自信のなかった彼が、精一杯練習やトレーニングに取り組み、自信をつけ試合に臨み、強豪校相手に怯まず最後まで腕を振って投げ切った姿に目頭が熱くなった。

そして月日は流れ、冒頭のシーンを迎えたわけである。私は、彼の成長する姿を見て色々なことを考えさせられた。その中でも、「可能性は無限にあり、誰もが成長するチャンスを持っていること」、「生徒を鼓舞激励すること」の大切さを実感した。諦めそうな時、苦しい時にこそポジティブな声を掛け続け、常に前進し続けていける環境を作ることで、自信がなかった生徒が継続力を身につけ、努力する楽しさを見出し、積み重ねてきた努力が大きな自信となって、プロ野球の世界に進んでいくまでに成長した。

この先の未来は誰にもわからない。だからこそ、挑戦する価値がある。ビッグドリームへの挑戦権を獲得したからには、ここからさらなる成長、飛躍を期待したい。



季節の変わり目の 不定愁訴^{ふていしゅうそ}*回避のポイント



※不定愁訴とは、患者からの「眠れない」「疲労感が取れない」「イライラする」「頭が重い」など、多岐にわたる自覚症状の訴えがあるものの、検査しても原因となる病気が見つからない状態を指しています。



ふっきん ぜんのすけ
腹筋 善之介

1965年大阪府出身。90年代演劇界を代表する劇団「惑星ピスタチオ」の座長/看板俳優として過酷な舞台に多数出演。

連日のパフォーマンス維持のためには、心身のメンテナンスが大切であることに気づく。

その後、スポーツジムのインストラクターとしてストレッチやトレーニングについて学び、肉体を酷使する源心御流中国拳法を体得。整体技術を整体師中川幸徳氏の下で習得。

演出家として子どもミュージカルの演出、プログラミング教育の指導者として大阪府内の小学校の教壇に立つなど、幅広く活動している。



季節の変わり目に現れやすい 原因不明の体の不調

私は2022年の年末、インフルエンザのため高熱が出ました。解熱剤も飲まず、どこまで熱が出るのか経過をみていますと、39.2度まで出たのです。でも、2日で高熱は治りました。そのことを報告すると、全体の師匠である中川幸徳先生は褒めてくださいました。今の私の年齢(57歳)でよくそこまで高熱を出せたなど。体力がないと高熱が出

ないので、高齢の方は高熱が出なくなるそうです。今の私の年齢で39度以上出せば上出来だと、先生は喜んでくださったのです。

そんな中川先生に、不定愁訴^{ふていしゅうそ}について聞いてみました。



不定愁訴は、日常的には使われない言葉かもしれませんが。愁訴は悲しみや苦しみを訴えることを意味します。不定愁訴は、原因がはっきり分からないけれど、なんとなく体調が悪いといった状態のことを言います。病院で診察・

検査を受けても、特に異常は見つからない、不調の原因が分からない。こうした症状を抱えている人はとても多いようです。症状を挙げると、頭痛、肩こり、腰痛、冷え、気分



が乗らない、むくみ、便秘、めまいなど。

特にこの季節の変わり目によく出る症状らしいのです。どうすれば良いのかを考える前に、こんなお話を。

一人芝居をさせていただいた時のことです。2時間に及ぶ膨大な量のセリフがありました。でも、4日間でなんとか覚え切ることができたのです。スタッフたちにとても驚かれ、どのように記憶したのかと聞かれました。

私は、歩きながら、またはお風呂に入りながら覚えると答えました。その時はよく理解していなかったのですが、特に山道などを歩きながら覚えるととても早く覚えることができるので不思議だと思っていました。

中川先生に話すと、それは脳が活性化しているからだ。歩くことで体は自然体となり、脳はとても活性化するそうです。特に街中を歩くより自然の中でのこぼこのある山道の方が脳はリラックスし、転ばないように足の動きを調整するために記憶力もアップするのだそうです。さらにこう言われました。体を普段から使い、脳を活性化すれば、不定愁訴になりにくいよと。



不定愁訴を回避するためのポイント1 よく歩く

中川先生に教えていただいた不定愁訴の大きな原因の一つは、気圧変化です。季節の変化に伴う気圧の変化によって、体が伸びたり縮んだりするそうで、筋肉のない人は特に影響されやすいのだそうです。例えば、ハワイが好きだという人が多いのは、高気圧が多いハワイでは、体が伸びて血管が広がることで血の巡りが良くなって、快適な体になるからだそうです。

ですから、日頃から歩き、筋肉をつけるよう心がけるのがポイントです。走るより、楽しく歩いた方が効果的なのだそうです。筋肉のある体を作ることを心がけていきましょう。



不定愁訴を回避するポイント2 体を温める

不定愁訴の大きな原因の一つは、気温の変化や乾燥です。気温の変化は心にまで影響を与えます。冷たい北

風が吹くだけで、気持ちも落ち込んでしまいます。防寒対策、風邪対策のため、厚着をお勧めします。

更に、耳や鼻も気をつけないといけません。耳は熱交換器の役割もあります。耳当てなどで外気から守り、体温が逃げるのを防ぎましょう。鼻もマスクなどで覆うことで楽になります。とはいえ、季節の変わり目は温度変化も激しいので、暑くなることもあります。そうすると、注意しなくてはいけないのは、前回も書かせていただきましたが、汗の処理。汗が出た時すぐに着替えることができるように準備が大切です。靴下や下着はすぐに着替えた方が良いのです。汗が乾く時、気化熱で体温が奪われ、体がストレスを感じます。汗の処理に注意しながら体を温めましょう。



不定愁訴を回避するポイント3 手足をほぐす

中川先生の整体は、最初に手足をほぐすことが特徴です。それは、手が柔らかくなると、脳が柔らかくなり(血が巡り活性化します)、早く体が弛んでくるから。頭が活性化すると、気持ちまでも前向きになります。新しいことに挑戦するチャレンジ精神が持続するようになります。

逆に骨折したり、捻挫したり、脱臼などがあると、どうしても体が硬くなりやすく、怒りっぽくなったり、消極的になったりするそうです。私の場合、左腕を子どもの時骨折しているのと、両足首の捻挫があるので硬くなっており、柔らかくなるようグリグリと回して柔軟性が出るように努めています。足湯などにより手足を温めて、柔らかくなるようストレッチをすれば、ポジティブな自分を取り戻せます。試してみてくださいね。



不定愁訴を回避するポイント4 食生活を見直す

不定愁訴とネットで調べると、大抵食事のことが出てきます。「バランスよく栄養をとりましょう!」というように。しかし、中川先生はいつも食べているものを食べなさい



と言われます。

前回もお伝えしましたが、私自身大きなストレスで体がこわばって、栄養が吸収できなくなってしまうということがありました。その時母親にお願いし、子どもの頃よく食べていた卵焼きなどを作ってもらったことにしたのです。すると、どんどん体が元気になったのです。「いつも食べているもの」というのは、「日本人が昔から食べているもの」、「子どもの頃からよく食べているもの」のことで、そういう食事は内臓にストレスを与えないのです。

ご飯、味噌汁、お魚、野菜など、どんなに栄養がある食物であっても、食べ慣れていないものは内臓にストレスを与えてしまうということでした。

また、辛いものはほどほどにとよく言われます。辛いものを食べると、内臓の粘膜が火傷状態になり、頭皮からも汗が出ます。脳が火傷



状態を察知し、体温を下げようとするため汗が出るのです。脳がスパークする一歩手前と言っても良いでしょう。中川先生に「インドの方はよく辛いものを食べるじゃないですか?」と反論すると、彼らはその後甘い果物を食べて、そして昼寝をして、状態を元に戻しているのだと説明されました。

いつも食べているものを、いつもの時間に食べるように心がけたいものですね。

不定愁訴を回避するポイント5 乾燥に気をつける

前回も書きましたが、水分補給が大切だということを、今回も繰り返しお伝えします。冬に体が乾燥し、春はとも水分を欲している状態になっています。先生が言うには、唇が乾いていればすでに脱水状態だと。私は唇が乾いてよくペロリと舐めてしまいますが、それもすでに脱水状態なのです。

また、風が強い日は、目からもどんどん水分が抜けていきます。皮膚からも水分が失われていきますので、保湿のためのクリームや油などを塗り乾燥を妨いでください。そ



して、こまめな水分補給を。水分を補給することで体液の濃度を安定させ、ストレスを感じにくい体にする事ができるのです。

不定愁訴を回避するポイントのまとめ

不定愁訴の原因は、気圧や気温の変化、風による乾燥、食生活の乱れなどによるストレスです。それらのストレスに気をつければ、不定愁訴を回避しやすくなります。そのために、歩いて筋肉をつけ、頭をリフレッシュさせ、防寒に気をつけ、手先足先を温めてこわばらないように留意して、いつもの時間にいつもの食事をする。汗が出た時はすぐに着替え、水分を適度に飲んで、汗に気をつけ乾燥対策をする。

さらに付け加えるならば、睡眠時間をなるべく長くとること。短時間睡眠は不定愁訴に陥りやすいと言われています。



とっても大切なおまけポイント

子どもたちが出演するミュージカルを演出する時、必ず子どもたちに伝えることがあるのです。それは、子どもたちを送り迎えして下さる方に、しっかりと感謝を表すことが必要だということです。子どもたちがちゃんと感謝をすると、親族の方々も心が安定します。するとどうでしょう。子どもたちも安定するのです。意味もなく叱ったり、怒ったりされるが減るだけで、子どもたちは安定してきます。ありがとうという感謝の言葉には、とても強力な力が宿っているのではないかといつも感じています。

介護医療院を経営されている中川先生は、来られた方に必ず、「今日会えて嬉しいです。感謝です、ありがとう。」というような言葉をかけるそうです。そうしてお互いが安定してくると、ストレスも減り、穏やかになるのだそうです。様々な原因で発症する不定愁訴ですが、ありがとうという言葉で心がけて、安定した環境に変えていくことをお勧めします。

外国人児童生徒たちの未来のために

にわのりこ
丹羽 典子 さん (65歳)

全国で最も外国籍の児童生徒が多い愛知県。自動車関連企業が多く、公立小中学校に通う外国人労働者の子どもの人数は群を抜いて全国1位だ(文部科学省令和3年調査)。

「柔軟な子どもたちはすぐに日本語を覚え、日常会話ができるようになりますが、日常会話ができることと日本語の授業を理解するということは全く別なのです」。愛知県小牧市で37年間小学校教諭をつとめ、現在NPO法人「にわのりの会」(外国人児童生徒の学習言語習得を支援する団体)を運営する丹羽典子さんはそう語る。

現役時代の7年間、校内の「国際教室」担任として外国籍の児童に向かい合った。「中学に行っても頑張ります」とはつらつと涇渭と卒業していく姿を見送っていたが、2年生の半ばくらいから、どうも元気がないという噂を耳にすることが多くなった。しかも一人だけでなく、何人もの外国人児童が中学生になると調子を崩していく。丹羽さんは、児童生徒の変化の原因を突き止めようと観察を続け、懸命に話を聴いた。

原因は言語だった。日本生まれ、でも家庭では親と母語で会話していたり、母語も確立されていない年齢で日本に来た子どもたちは、母語も日本語も中途半端な「ダブルリミテッド」という状況に陥り、全ての教科にわたって理解が進まなくなっていく。中には、授業についていけず不登校になる子どもも。勉強をドロップアウトしてしまうため、学力が原因で公立高校には進めず、経済的理由で私立高校にも行けない。障がいがあるわけではないのに、特別支援学校に行かざるを得ない子どもたちもいた。1990年の入管法改定によって外国人児童生徒は増加の一途を辿る中、



にわとり式カードを手にする丹羽典子さん



日本語の授業についていけない外国籍の子どもたちを、丹羽さんは歯ざしりする思いでみてきた。

「言語や文化の壁によって、子どもたちの可能性をつぶしてなるものか」。丹羽さんは外国人児童生徒や保護者の話を改めて聞き取った。その結果、学習を怠っているのではなく、字が読めないこと、しかも小学2年生の漢字でつまづいていることを発見したのだ。

2年をかけて、母語と日本語を、音や絵を使って繋ぐ教材「にわとり式漢字カード」を開発。子どもたちから「にわのり(丹羽典子の略)先生」と呼ばれていたことから名付けた教材だ。1006文字の音読み訓読みが入った例文とイラスト、6か国語が一体となった新しい教材を誕生させた。現在、アプリストアで販売中だ。

2018年に定年を迎えたが、外国人児童生徒の学習言語をサポートする活動は止まることはない。地域や学校で、この活動を支援してくれる仲間と共に子どもたちの未来を支える。「これからますます外国人児童生徒が増えてくるでしょう。今、まさに学校でどう教えたらいいかと困っている先生もいらっしゃるかもしれません。日常言語と学習言語は一致しないことを知った上で、適切な時期に適切な方法で外国人児童生徒を導いてほしいと願います。わたしたちの研究と教材が、現役の先生方のお力になれば嬉しいです」。

最近では全国各地でのセミナーに加え、日本語を教える人材の育成にも力を入れる。丹羽さんから日本語を学んだ教え子たちが教師を目指して巣立とうとしている姿を、親鳥のように見つめる。



一つの漢字につき一枚のカードになっている「にわとり式漢字カード」。表には読み方と例文が。裏には北京語・広東語・英語・スペイン語・ポルトガル語・タガログ語の6か国言語で例文の翻訳を掲載。セットになっているタッチペンで文字に触れると、音を読み上げてくれる仕組み。りんごのイラスト部分をタッチすると、世界共通の「むしゃむしゃ」と食べる音が出るなど、子どもの意欲を引き出す工夫が随所に

NPO法人にわのりの会 <https://www.niwatoris.org>



アプリの購入先

Android用 

iPhone用 

三重県立 おうか 相可高等学校

地域から世界へ

松阪牛で有名な三重県松阪市。県立相可高等学校は、松阪市に隣接する多気郡多気町にある総合高等学校だ。普通科・生産経済科・環境創造科・食物調理科の4科、約560人が学んでいる。

「農」を基幹とする生産経済科では、ハイテク農業とともに国内で唯一「松阪牛」を学ぶことができ、「食」を基幹とする食物調理科は、三重県の県立高校では唯一「調理師免許」の取得が可能。数多くの一流料理人やパティシエを輩出する。この2つの科は互いに連携し、地域との協働においても特徴ある活動を続けていることで知られている。

食物調理科の調理で出る食品残渣から排出されるバイオマス液を利活用し、そのバイオマス液が作物の生育を促進させることを確認して、バイオバジルオイルという人気の商品を生み出したのは生産経済科の生徒たち。松阪牛についても、地元の肥育農家から子牛の見極め方を習い、但馬へ1泊2日で研修に毎年出向いていく。子牛を仕入れ、校内で約3年育てた松阪牛は特選松阪牛として共進会で値が付き、出荷され販売される。産業動物と割り切るものの、出荷のときには涙を流す生徒たち。命をいただくことを学ぶのは、相可高校の伝統でもある。

そして、大切に育てられた畜産物や野菜は、食物調理科の生徒たちによって、世界に通用する料理となる。ローカルをグローバルに展開するという「グローバル」を目指し、台湾、中国、フランス、イタリア、スペインと食

を通じての交流を続け、世界の一流シェフも招聘。作るだけでなく、一流のサービスや経営を学び、プロフェッショナルを目指す。その取組は、世界を食で繋ぐ文化活動としても各国から注目される。

2007年には、多気町・五桂池ふるさと村・相可高校が協力し合い「まごの店」をオープン。生徒たちが運営する「高校生レストラン」だ。農産物を販売する「おばあちゃんの店」の隣でスタートしたこと、地域の人たちからみれば、高校生は孫みたいなのだというので「まごの店」と名付けられた。

地域一丸となつての取組は、東京での出張レストランを実現させ、2016年G7伊勢志摩サミットでは、各国首脳の配偶者を生徒たちがランチでもてなした。世界の舞台を踏んだ食物調理科の生徒たちは、高校生国際料理コンクールでの金メダル常連校に名を連ねる。

2017年には、文部科学省「スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール(高度な知識・技能を身に付け、社会の第一線で活躍できる専門的職業人の育成を図るスーパー・プロフェッショナル・ハイスクール事業)」の指定校となり、実践研究が進められた。

徹底的にローカルにこだわるのがグローバルにも通じることを、農と食で実践する三重県立相可高等学校。「高校生には無理」という固定観念を、地域との連携・協働によって覆し、世界からも注目される存在となった。その根底には、生徒たちをプロフェッショナルにするために奮闘する、教師陣の弛まぬ努力と研鑽の日々があることを忘れてはならないだろう。



食物調理科の実習風景。この日はタイ料理



食品残渣から排出されるバイオマス液を利活用。その液で育てた香り豊かなバジルを使った「バイオバジルオイル」。お茶漬けに数滴垂らしても美味しい



相可高等学校を率いる浅沼千恵校長



3年前に着任した高校OBの西岡宏起 教諭(食物調理科)



食物調理科 園部かしこ 教諭



生産経済科 三輪進 教諭

ジブラルタ生命は未来を担う子どもたちを応援しています。

『Magic of the Dream』

子どもたちの『夢を叶える力』を育む“感動”や“驚き”を得られる体験をプレゼントし、『希望にあふれる未来』へと繋ぐ“架け橋”となるプログラムを全国各地で実施します。各活動には、ジブラルタ生命の社員がボランティアスタッフとして積極的に関わり、子どもたちにエールをおくります。



Magic of the Dream ドリーム・スクール・キャラバン

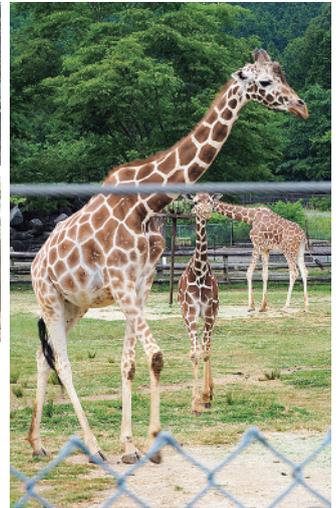


プロからの直接指導に “ドキドキ”“ワクワク”

全国の小学生を対象に、47都道府県をキャラバンしていく本プログラムでは、スポーツや文化活動などさまざまな教室を実施し、たくさん子どもたちに夢のような時間をプレゼントしていきます。



Magic of the Dream ドリームナイト・アット・ザ・ズー



来園者をおもてなし!

障がいのある子どもたちとご家族を動物園や水族館に招待し、気兼ねなく楽しいひとときを過ごしてもらおう国際的なイベント、ドリームナイト・アット・ザ・ズー。当社は、2012年からこのイベントを実施している動物園・水族館をサポートしています。

PRUDENTIAL EMERGING VISIONARIES

ボランティア・スピリット・アワード ～未来を描くチカラ～



ボランティアに取り組む中学生・高校生を応援!

ボランティア・スピリット・アワードは、ボランティアに取り組む中学生・高校生を応援するプログラムで、1995年にアメリカでスタートしました。日本では1997年から開催され、今では世界各国で行われる国際的なプログラムとなっています。

数学オリンピック

(公財)数学オリンピック財団への協賛を通じて、数学的才能に恵まれた子どもたちをコンテストで励まし、才能を伸ばす手助けや交流の場に出に協力しています。



ベルマーク運動

(公財)ベルマーク教育助成財団のベルマーク運動に協賛企業として参画し、個人のお客さま向け生命保険全商品の新規ご加入1契約について、一律100点のベルマークポイントを付加しています。



メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン

3歳から18歳未満の難病と闘う子どもたちの夢をかなえ、生きる力や病氣と闘う勇気をもってもらいたいと願って設立された(公財)メイク・ア・ウィッシュ オブ ジャパン。財団主催のイベント協賛や社員のボランティア参加などを通じて難病の子どもたちをサポートしています。



ジブラルタ生命保険株式会社は、公益財団法人日本教育公務員弘済会の共済事業(提携保険事業)の提携会社として、70年以上にわたる提携を通じて教職員の皆様の福祉向上をお手伝いさせていただいております。

<https://www.gib-life.co.jp/>

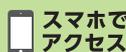
ジブラルタ生命 検索

(本広告の掲載内容に関する問い合わせ先) ジブラルタ生命保険株式会社 提携団体チーム TEL:03-5501-6520

国内外20万ヵ所以上のサービスがお得に！ 福利厚生サービス「日教弘クラブオフ」

日教弘クラブオフへのログイン方法

STEP. 1 日教弘クラブオフの専用ホームページへアクセス。

 スマホでアクセス   パソコンでアクセス
<https://www.club-off.com/nikkyoko/>

STEP. 2 ログインIDとパスワードを入力してログイン。

日教弘クラブオフ

ログインID

パスワード

ログインIDを次回から自動表示する

ログイン

ログインせずにサイトを見る

> ログインID、パスワードを忘れた方へ

ログインID
 会員証に記載されている「支部コード(2桁)」
 +「会員番号(8桁)」計10桁の半角数字

初期パスワード
 ご自身の生年月日(半角数字8桁)
 ※例: 2003年4月15日生まれ → 20030415
 ※初回ログイン時にパスワードを変更いただけます。

さらにログイン後に

こんな方法でも

クラブオフアプリをダウンロードして、もっと便利に!



※Apple および Apple ロゴは、米国およびその他の国で登録されたApple Inc.の商標です。
 ※Google Play および Google Play ロゴは、Google LLC の商標です。

Present! 毎月何度でも、すべての賞品に応募できる! わくわく毎月プレゼント

グルメ・映画チケット・宿泊補助券まで、賞品ラインナップを多数ご用意しています。

宿泊補助券
5,000円分
毎月**5**名様

選べる
カタログギフト
毎月**5**名様

映画館
鑑賞チケット
毎月**3**組**6**名様

クオ・カード
3,000円分
毎月**3**名様

他にも様々な賞品が盛りだくさん!
日教弘クラブオフホームページをチェック!

わくわく
毎月プレゼント

※バナーデザインは変更になる場合がございます。

ご応募はこちらから▶

※ご応募には日教弘クラブオフへのログインが必要です。



上記二次元コードよりご応募いただけない場合、日教弘クラブオフホームページでキーワード「わくプレ」や申込No.「5000087」で検索!

●日教弘クラブオフに関するお問い合わせは
0800-919-6189 まで。 通話料無料 営業時間 10:00~18:00 (年末年始除く)

※掲載内容は2023年3月現在の情報です。予告なく変更になる場合がございますので、あらかじめご了承ください。
 ※ご応募の際は必ず日教弘クラブオフホームページをご確認ください。※画像はすべてイメージです。

●東京海上日動は、公益財団法人日本教育公務員弘済会の福祉事業「教弘まなびやスーパープラン」「教弘フルガード」「教職員収入ロングウェイサポート」の引受保険会社です。

マングローブの森づくり。
 それは、豊かな地球を
 未来に届けること。

マングローブ植林は「地球の未来にかける保険」です。
 これからも、ともに未来へ。

マングローブ価値共創 100年宣言



東京海上日動

www.tokiomarine-nichido.co.jp

To Be a Good Company

プロジェクト学習で明日を創る人になる

ふく い けんかつやま し りつかつやまちゅう ぶ ちゅうがっこう
福井県勝山市立勝山中中部中学校

※表紙写真：上段(体育祭)、下段左(勝山探究プロジェクト)、下段右(安らぎ安全プロジェクト)



スキー教室(絆プロジェクト)



学校祭(学校・学級力向上プロジェクト)

福井県立恐竜博物館を誇る勝山市では、令和9年度より三つの中学校が統合され、新中学校として生まれ変わります。子どもたちの誕生から高校卒業までの成長を市民総掛かりで支援する教育の中核施設として、市内県立高校敷地内に連携型中高一貫校の新校舎が建設されます。本校は新中学校の教育方針を先取りし「明日を創る人になる」を合い言葉に、小学校や高校、地域と連携して生徒が主体的・探究的に課題解決をめざすプロジェクト型の学習に取り組んでいます。



母校でのあいさつ運動(ふるさと創生プロジェクト)



クリスマス集会(自主・自律プロジェクト)



校区が誇る
 福井県立恐竜博物館



〒911-0035
 福井県勝山市
 郡町1丁目3-34

【鉄道・自動車】 ● えちぜん鉄道「勝山駅」(勝山永平寺線)より車で10分
 ● 中部縦貫自動車道「勝山IC」より車で10分
 【HPのURL】 <http://katsuyamachubu.mitelog.jp/>





日教弘マークについて

公益財団法人 日本教育公務員弘済会<略称:(公財)日教弘>は、
都道府県を含む総称を「教弘」としていることから、
アルファベットの「K」がそのイニシャルです。
「K」を中心にした楕円形は、日教弘本部・支部が一致協力して事業推進していることを象徴しています。
全体のイメージは、未来への飛躍を展望したものです。



公益財団法人 日本教育公務員弘済会<略称:(公財)日教弘>の教育振興事業(奨学事業、教育研究助成事業、教育文化事業)及び福祉事業は教弘保険の契約者配当金により運営されており、日本の教育界に貢献しています。



公益財団法人 日本教育公務員弘済会 <https://www.nikkyoko.or.jp/>

